第 8 章

なぜカナダは移民を受け入れるのか？（城戸英樹）

1　はじめに

社会科学の目的は、社会に関する不思議なことや分からないことを見つけ出し、なぜそうなっているのかを解明することである。これによって、社会に関する新たな法則が見つかったり、社会現象についてこれまで知られていなかった理由が明らかになったりする。本章の執筆者の専門は政治学と呼ばれる領域であり、社会科学の中で政治現象を対象とする。政治と聞くと難しそう、よくわからないと思うかもしれない。けれども、本章を含めて政治を取り上げた各章を読んでみて、本当に難しいか考えてもらいたい。意外に面白いと思うことがあるのではないだろうか。

この章では、カナダという国を事例に、ある社会現象がなぜ起こるのかを政治学的に考えていく。具体的には、カナダがなぜ移民を受け入れるのかについて、政治的な側面に焦点を当てて考える。もちろん、社会現象が起こる理由は政治的な側面だけでとらえられるわけではない。文化的な理由があるかもしれないし、法的な理由があるのかもしれない。それでは、政治的側面から見るだけでは不十分だと思うかもしれない。

しかし、社会科学で大切なのは、ある視点から見るとその社会現象はこのようにとらえることができるという発見をすることである。例えば、地球儀を想像してみてほしい。日本が見えるところから見ると、反対側のブラジルは見ることができない。他方で、南極が見える位置ではブラジルなどは見えるが、日本は見えないだろう。このように見る視点をどこに置くのかによって、地球儀の見え方は異なるだろう。

社会科学もこの地球儀の見え方と同様で、どの視点から見るかによって、社会現象の見え方は当然異なる。しかし、この視点から見るとこのように見える、その見え方の理由はこのようなものである、ということを積み重ねることで、最終的な社会の全体像を作り上げていくことができる。

皆さんが卒業論文を書く時、レポートをまとめる時にも、自分にはその社会現象がどう見えるのか、それが他人（先行研究）とはどう違うのかを意識してもらいたい。よく自分のテーマには先行研究があって、それと自分の考えが全く同じだという学生がいる。しかし、他人とこれまで経験してきたことも知識も異なるのに、社会が全く同じ見え方をするということがあるだろうか。ぜひ、大学での学びを通じて自分自身の視点で社会を見る努力をしてもらいたい。

それでは、本章の内容に入っていこう。カナダと聞くと皆さんはどのようなことを頭に思い描くだろうか。オーロラやロッキー山脈などの雄大な自然、メープルシロップなどの特産物が挙がるだろう。また、『赤毛のアン』の舞台であるプリンス・エドワード島もカナダにあり、夏のシーズンには多

くの日本人観光客を迎えている。さらに、日本人の学生にとっては、語学留学やワーキングホリデーのための滞在先としても、カナダは人気の目的地になっている。このように、カナダのイメージは、自然豊かで外国人にも住みやすいというものだろう。

これらの特徴に加えて、カナダが世界有数の移民国家であるということを知っているだろうか。カナダはそもそもイギリスとフランスの植民地として成立した歴史を持つ[*1]。そのため、現在でも連邦[*2]レベルでは英語とフランス語の二つの言語がカナダの公用語[*3]とされている[*4]。このような二言語政策に加えて、カナダは毎年多くの移民[*5]を受け入れる移民国家である。

しかし、移民と聞くと日本では肯定的なイメージを持たない場合も多いのではないだろうか。日本は長らく移民の受け入れに消極的であると考えられてきた。実際、日本で新たに永住権を取得する人の数はここ数年毎年 1〜3 万人程度とそれほど多くはない。このような日本から見ると、なぜカナダが毎年多くの移民を受け入れているのかは不思議なことに思える。本章では、なぜカナダが移民を多く受け入れているのかという不思議について政治的な側面から考えていこう[*6]。

【考えてみよう】

- カナダについて、どのような印象を持っているのかを話し合ってみよう。
- カナダが移民を受け入れる理由をいくつか考えてみよう。
- カナダのような連邦制と日本のような単一制の制度ではどのような違いがあるだろうか。

2　カナダはいつから移民を受け入れているのか

ここでは、カナダが移民を受け入れる理由について考える前に、そもそもいつからどのようにしてカナダが移民を受け入れてきたのかについて、歴史的な経緯を見ていく[*7]。社会現象が起こっている原因を考える前に、そもそもいつからどのようにしてその現象が起きてきたのかを知ることが大切である。急に起こったことなのか、昔から少しずつ変化してきたのかなど、社会現象が起こるプロセスは様々である。そのため、分析対象である社会現象がどのようなものかを特定しないと、その理由を考えることは難しい。

ヨーロッパによるカナダの「発見」は 11 世紀から 12 世紀にまでさかのぼることができる[*8]。この時期に現在のノルウェーからバイキングと呼ばれる人々がカナダに渡っていたことがわかっている。

[*1] ヨーロッパによる「発見」以前からもカナダを含めた北米大陸には先住民が住んでいた。これらの先住民に対するヨーロッパの「侵略」についても、アメリカとカナダの違いや共通性などを調べてみるとよい。

[*2] カナダは連邦制をとっており、中央政府として連邦政府、地方政府として州政府と基礎自治体がある。これに対して、日本は単一制をとっている。

[*3] 連邦レベルでの公用語として、英語とフランス語が定められている。ここでの公用語とは、英語とフランス語のいずれの言語でも連邦政府のサービスにアクセスできることをいう。

[*4] カナダに 10 ある州、3 ある準州では、それぞれ公用語を定めている。フランス語のみが公用語の州（ケベック州）、英語のみの州（オンタリオ州など）、先住民の言語も含めて公用語になっている準州（ユーコン準州など）など、多様性に富む。

[*5] 国連の定義では移民とは一定期間（おおむね 1 年以上）母国を離れて他国に居住する人を指す。この定義では、留学生や労働ビザで就労する労働者なども移民に含まれる。しかし、本章では国家の構成員としての移民を想定しているため、永住権などを取得してその国に永続的に住む人を移民として考える。

[*6] 本章を読んでカナダに関心を持った人は、日本カナダ学会（2009）や章末の参考文献リストに挙げたある文献などを読むとカナダについてより多くのことを知ることができる。また、2 回生配当の「現代北米論」では、カナダ社会を中心とした北米社会を取り上げる。

[*7] 以下のカナダの歴史に関する記述は、木村（1999）、細川（2007）を主に参照した。

[*8] 最初の「カナダ人」（カナダに居住した人）は、14000 年前までさかのぼることができる。この頃、ユーラシア大陸から北アメリカ大陸に人類が進出し、13000 年前〜12000 年前には北アメリカ大陸各地に石器文化が築かれた。

しかし、本格的にヨーロッパからの植民がスタートするのは 15 世紀末の大航海時代を待つ必要がある。1583 年にニューファンドランドがイギリス最古の海外植民地になったのを皮切りに、1604 年には大西洋岸がフランス植民地になるなど、イギリスとフランスによってカナダの植民地化がすすめられた[*9]。両国の植民地化によって、カナダにはイギリス系とフランス系の二つの社会が存在する基礎となった。

それでは移民の歴史を簡単に見ていこう[*10]。まず 17 世紀には、フランス植民地にフランスからの移民が流入した。次に、18 世紀に入ると英仏戦争の結果フランスに勝利したイギリスがカナダの多くを領有することになったことを受けて、イギリスからの移民が増える。このイギリスからの移民には、イギリス本国からの移民に加えて、アメリカが独立する際に逃れてきた王党派の人々などが含まれていた。その結果、現在のカナダ社会ではイギリス系が多くを占めるようになった[*11]。その後、18 世紀半ばには、ドイツ系の移民が主にアメリカ合衆国から流入する[*12]。18 世紀から 19 世紀にかけてはイタリア系やユダヤ系の移民が増える。さらに、19 世紀半ばにはプレーリー（カナダ中央部の大平原地帯）の農地化を進めるために東欧や北欧の移民が誘致された。また、この頃、大陸横断鉄道建設のために安価な労働力が必要となり、中国系移民や日系移民[*13]がカナダに渡った。

【考えてみよう】

- 歴史的にそれぞれの時期にある国や地域からの移民が増えていることがわかる。なぜこのようなことが起こったのかを考えてみよう。
- 日本からカナダへの移民の歴史を調べてみよう。

3　カナダの移民の現状

次に、カナダの移民の現状を見ていこう。次頁のグラフ（図 1）を見るとわかるように、カナダは近年毎年 20〜30 万人の移民を受け入れている。これは、人口の 0.5〜0.8 %を毎年移民として受け入れていることを意味する。日本の人口で考えれば、毎年 60〜100 万人の人口が移民によって増えることになるので、カナダの移民受け入れ数の多さがわかるだろう[*14]。

カナダへの移民の多くは、トロント、バンクーバー、モントリオールなどの大都市圏に居住する。これらの大都市には、すでに各民族のコミュニティが発達しており、カナダ社会に溶け込みやすいというのが一つの理由である。

カナダにおける多民族社会の一つの特徴がこの民族コミュニティの存在である。民族コミュニティの在り方について、隣国のアメリカは「メルティングポット」と称されるのに対し、カナダ社会は「サラダボウル」と呼ばれることがある[*15]。アメリカでは、すべての民族はアメリカ社会に溶け込み「アメリカ人」になることを求められるとされる。そのため、各民族が溶け合ってアメリカ社会が構

[*9] その後の植民地の歴史は本章とは直接かかわらないので、「現代北米論」の講義に譲る。
[*10] 以下の移民の歴史は、細川（2007）、綾部・飯野（2010）を参照した。
[*11] イギリス系国民は現在も最大勢力であり、2001 年時点で 47.1 %となっている。ただし、1871 年には 60.6 %を占めていたので、多民族の移民流入によってその割合は徐々に低下している。
[*12] イギリス王室はそもそもドイツに起源をもつ（ハノーバー選帝侯）。そのため、アメリカからイギリス植民地であったカナダにドイツ系移民が流入した。
[*13] 日系人移民の歴史については、「現代北米論」でもう少し詳しく扱うので、関心があればそちらを受講してほしい。
[*14] 繰り返しになるが、本章での移民は留学生などの短期〜中期滞在は含んでおらず、永住権を取得した人を指す。永住権とは、カナダに住む権利を付与されたことを意味するが、カナダ国籍を取得したこととは異なるので、その点も注意してもらいたい。
[*15] 例えば、XXXX 参照。

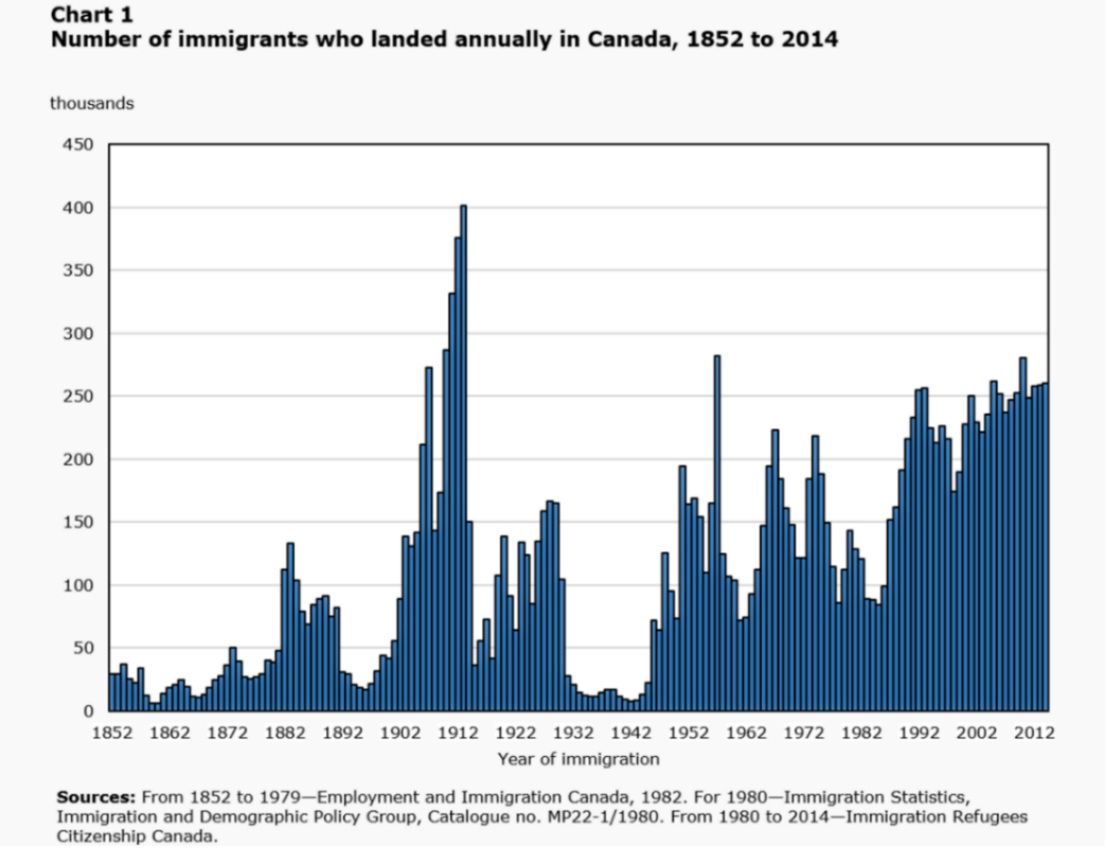

図 1　カナダへの移民数の推移

（【出所】Statistics Canada “150 years of immigrations in Canada”を転載。）

成されている。

これに対して、カナダでは、民族コミュニティはそれぞれの独自性を保っているとされる。例えば、中国系がチャイナタウンを、イタリア系はリトルイタリーをといった形で、民族ごとが固まって住んでいる地域が大都市に形成されている。これらの民族コミュニティが後から来る移民の受け皿として機能する。その結果、トロントは住民の過半数がカナダ国外で生まれた人によって構成されている。これは裏返せば、カナダ人として生まれた人の割合が半分よりも少ないことになる。その意味で、トロントは移民によって構成される移民都市であるといえるだろう。

また、移民たちは大都市に均一に居住しているわけではない。アジアに近いバンクーバーにはアジアからの移民が多いのに対し、モントリオールはアフリカ系の移民が比較的多い。まず、バンクーバーには巨大な中国系コミュニティが存在し、そこに新たな移民が流れ込んでいる。そのため、バンクーバー郊外のリッチモンド市には、中華系のショッピングモールがあるなど、中国語だけでも生活できるような環境が存在する。それに対して、モントリオールにアフリカ系移民が住む理由はどのようなものだろうか。モントリオールは、フランス語が公用語のケベック州の経済的な中心である。そのため、旧フランス領植民地だったアフリカ諸国からの移民がモントリオールを目指して居住している。

さらに、移民たちが大都市を目指す理由には、就職の問題もある。上に挙げた大都市は、それぞれの地域の経済的な中心であり、就業機会もより多く存在する。多くの移民は、一般のカナダ人と比べ

ると就業面で不利に置かれるため、より多くのチャンスがある大都市を選択している[*16]。

【考えてみよう】

- カナダの主な都市の民族構成を調べてみよう。
- カナダの移民の経済水準を調べてみよう。

4　なぜカナダは移民を受け入れるのか

ここまで、カナダが歴史的にどのような移民を受け入れてきたのか、また現在のカナダの移民受け入れの状況はどのようなものであるのかについて、説明してきた。そこでは、カナダがこれまで多くの移民を受け入れ、現在も受け入れていることが分かった。ここからは、カナダがなぜそのように多くの移民を受け入れているのかを考えていこう。

日本で考えると、一般的にある国が多くの移民を受け入れることは不思議なことではないだろうか。それは、移民を受け入れると社会に多くの問題を引き起こすと感じるからだろう。例えば、移民を受け入れると治安が悪くなると考えたり、移民が労働機会を奪うと考えたりして、移民受け入れに反対することが考えられるだろう[*17]。

先にも述べたように、移民受け入れに熱心なカナダにおいても、移民第一世代の経済水準はカナダ人全体の平均よりも低いとされる。経済水準が低いということは、犯罪率が高くなることにつながり、治安の悪化を招くと考えられる。また、移民は生活するために就業する必要がある。すると、就業する移民に職を奪われる国民が出てくることになる。多くの移民を受け入れるということはそれだけの職が奪われることになり、移民受け入れに反対する国民が出てくる。

このように、移民を受け入れることは社会に問題を引き起こすように思われる。それにもかかわらずカナダはなぜ多くの移民を受け入れているのだろうか。本章は、この問いに対して。政治的な側面から答えを出すことを試みる。初めにも述べたように、カナダが移民を受け入れる理由には様々なものがあるだろう。例えば、文化的な理由を考えれば、カナダはそもそも海外植民地として出発したために、移民受け入れに寛容な文化が存在するのかもしれない。

このように、他の要因が考えられる中で政治的な理由に注目する意義はどのようなものだろうか。それは、移民の受け入れが政治決定と密接に関係しているからである。移民受け入れは、社会的に許容されるから自然と決定されているわけではない。世界各国はそれぞれの国によって異なる移民政策を実施している。カナダは移民の受け入れに寛容だし、日本はそれほど寛容ではない。これらの違いは、各国政府が移民の受け入れに異なる政策を採用しているから生じている。そのため、カナダが移民を受け入れている理由を考えるうえでは、カナダ政府がなぜ移民受け入れという政策を採用しているのかを明らかにすることが必要になる。

カナダ政府はなぜ移民受け入れという政策を実施しているのだろうか。例えば、隣国のアメリカでは、トランプ大統領の就任以来、移民受け入れに消極的な政策に転換しているように見える。その理由として、先に挙げた、移民によって治安が悪化する、移民によって職が奪われるといったことが挙げられている。このように、移民国家とされるアメリカにおいても、移民政策は変化しつつある。そ

[*16] 移民の第一世代は、一般的なカナダ人よりも平均収入が低い。また、労働条件が厳しい職に就かざるを得ない場合もある。

[*17] 移民が社会にどのような影響を及ぼすのかについてより深く知りたい人は、経済学の視点から移民を検討した友原（2020）を参照するとよい。

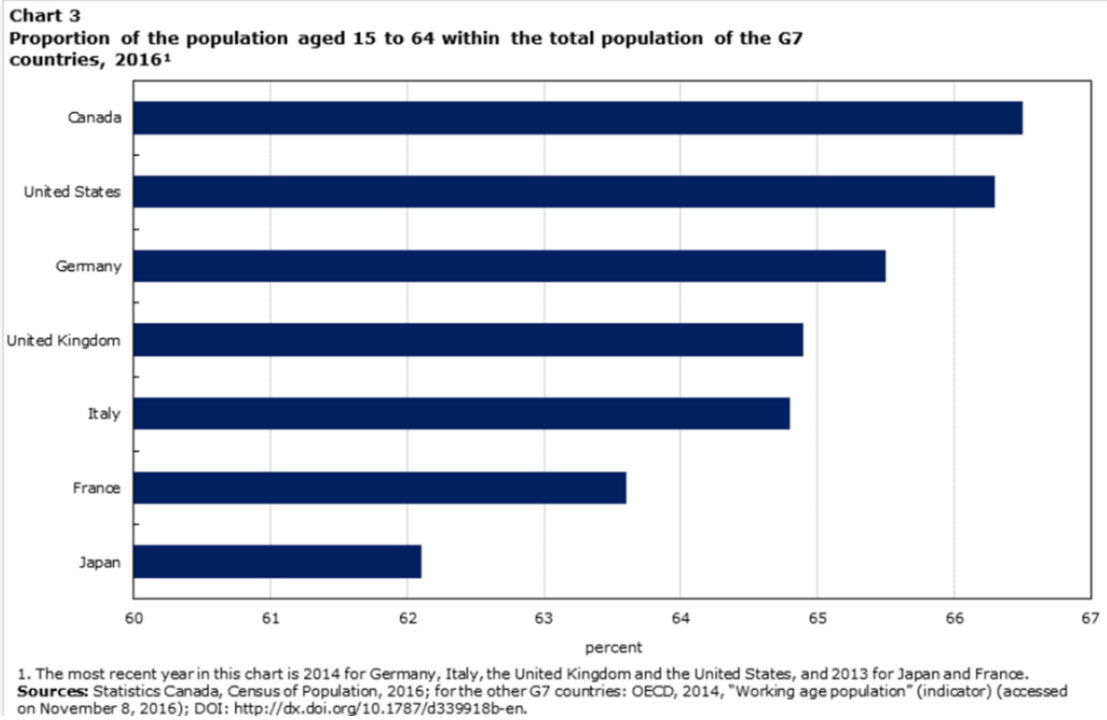

図 2　先進国の労働人口割合（【出所】Statistics Canada, “2016 Census in Brief” より転載。）

の中で、カナダはなぜ移民を受け入れているのだろうか[*18]。

カナダが移民を受け入れている政治的な理由として、ここでは二つの要因を挙げる。一つ目は社会構造に注目した要因、二つ目は利益[*19]に注目した要因である[*20]。

まず、一つ目の社会構造に注目した要因とは、少子高齢化対策という点である。日本では、少子高齢化が長らく問題となっていて、出生率を上げる試みが多くなされてきた。この少子高齢化問題は日本のみの問題ではなく、多くの先進国が抱えている共通の問題でもある。次頁の図 2 を見るとわかるように、先進国では少子高齢化によって生産年齢人口（15〜64 歳の人口割合）が低下している。生産年齢人口の減少は経済活動の停滞を招き、国の衰退へとつながる。そのため、先進各国は少子高齢化問題を解消すべく様々な政策を展開している。

この少子高齢化に対する処方箋はさまざまで、日本のように少子化を解消するための子育て支援政策を実施するというのは対応策の典型例の一つだろう。それに対して、カナダは少子高齢化対策の一つとして、移民の受け入れを行っている。後に述べるように、カナダはどのような移民でも受け入れているわけではない。カナダが受け入れる移民の重要な条件の一つが若いということである。つまり、カナダは少子高齢化に対応して生産年齢人口を増やすために、若年層を移民として受け入れている。

次に、より利益に注目した理由を探っていこう。ここで、移民の受け入れがカナダにとって利益になるとはどのようなことだろうか。ここでカギになるのは、カナダの移民制度である。カナダでは、移民の受け入れについて、「ポイント制」を採用している[*21]。このポイント制はそもそも人種や民族、

[*18] 以下の分析は、古地（2017）を参照した。
[*19] ここでいう利益とは、金銭的な利益よりも広い概念である。ある主体にとって、プラスとなることを利益と呼ぶ。
[*20] 政治学では、社会・政治現象を説明する理由について、大きく分けて、政治制度・社会構造、利益、アイディア・文化という三つの側面がある。
[*21] 日本でも、長期労働者ビザの発給について、ポイント制を採用している。

表 1　カナダのポイント制の推移（【出所】細川道久（編著）『カナダの歴史を知るための 50 章』（明石書店、2017）、p.283 より転載。）

表　ポイント制における熟練労働者に対する点数配分の変化

選別評価項目	1967年	1978年	1985年	1993年	2002年	2016年現在
学　歴	20	12	12	16	25	25
公用語運用能力	10	10	15	15	24	28
職　歴	—	8	8	8	21	15
カナダでの雇用確保	10	10	10	10	10	10
職種への需要	15	15	10	10	—	—
職業訓練	10	15	15	18	—	—
定住先	5	5	10	10	—	—
年　齢	10	10	10	10	10	12
人　柄	15	10	10	10	—	—
カナダ在住家族	5	5	—	—	—	—
適応能力	—	—	—	—	10	10
合計点	100	100	100	107	100	100
合格点	50	50	70	70	75	67

出所：D. Karmis et J. Koji (2009) "L'instrumentalisme néolibéral et l'hospitalité coloniale: une ciritque de la politique canadienne de sélections des immigrants" dans D. Karmis et L. Cardinal (dirs.) *Les politiques publiques au Canada: pouvoir, conflits et idéologie*. Ste-Foy. Les Presses de l'Université Laval, p. 130 及び Immigration, Refugees and Citizenship Canada のウェブサイト

出身国による差別を排除する目的で 1967 年に導入されたものである。そこでは、客観的な指標によって、ある基準を満たした移民は基本的には全員受け入れるという方針が示されている。このポイント制の導入によって、アジア、アフリカ、カリブ系の移民が大きく増加することとなった。

その後、ポイント制について細かな修正は行われてきたが、基本的の方向性に変わりは見られない。上図 3 を見るとわかるように、現在のポイント制では、年齢、学歴、公用語（英語とフランス語）の運用能力、職歴、配偶者がいる場合は配偶者の属性などによって、ポイントが決定される。このポイントが 67 ポイントを超えていれば、申請を行えば基本的にはカナダの永住権を取得することができる。

このようなポイント制の採用にはどのような意味があるのだろうか。まず、大切なのは年齢である。申請者の年齢が 18 歳から 35 歳までは 12 ポイントが加算され、35 歳を超えると毎年ポイントが 1 ポイントずつ減り、47 歳以上は年齢によるポイント加算がなくなる。これは、カナダが若年層を移民として受け入れたいという意向の表れということができる。さらに、学歴（25 ポイント）と公用語運用能力（28 ポイント）に高い比重が置かれている。学歴についていえば、例えば、博士課程修了者は 25 ポイント、大学修了者は 21 ポイントが与えられる。公用語運用能力についても、特定のテストスコアによって語学力が判断され、ポイントが付与される。これらの要素はいずれもカナダに移民した後で就労するために必要となる項目である。カナダは、これらの要素を移民の受け入れに用いることにより、高度な技能や専門性を持つ移民を受け入れることができる。

このように、カナダが受け入れる移民の条件は若く、学歴があり、公用語を操ることができるということである。あるカナダ人に、なぜカナダは移民を受け入れるのか尋ねたところ、「他国が税金を

費やし教育してきた人材を受け入れることはカナダの利益につながる」と述べていた。カナダは決して善意で移民を受け入れているのではない。むしろ、カナダは戦略的に移民制度を運用しており、カナダにとって利益につながる人材を移民として受け入れているのである。

【考えてみよう】

- 移民受け入れは治安の悪化や失業率の上昇につながらないという様々な研究がある。図書館の英語論文検索でそのような研究を見つけてみよう。
- 少子高齢化対策としての移民の受け入れにはどのような問題があるだろうか。
- 自分がカナダに移民できるようになるにはどうしたらよいのか考えてみよう。

5　おわりに

本章では、なぜカナダが移民を受け入れるのかについて、政治的な側面から検討を加えてきた。そこで分かったのは、カナダは少子高齢化という社会問題に対応する方策として移民の受け入れを行っているということであった。カナダでは、少子高齢化がもたらす労働人口の不足に対応するために、若い、学歴があり、公用語運用能力のある人材を移民として受け入れているのである[*22]。

ここで、カナダが移民を受け入れているのには、他にも重要な理由があるのではないかという疑問を持ったかもしれない。そのような疑問を持つことは当然のことで、ぜひたくさんの疑問点を見つけてもらいたい。そのような疑問点は皆さんがレポートや卒論を書くための種になる。自分が見つけた理由は本章で述べた理由と比べて何が、またどのように、説得的なのかを考えてもらいたい。そのように、自分の考えを見つけ出し、発展させることができれば、社会に出てからもきっと心強い武器になるはずである。

政治学では必ずしも個人や集団、国家などの政治主体が善意によって行動しているのではなく、自らの利益や社会構造などの影響を受けながら行動していると考えることがある。しかし、このような視点は政治学の一部を構成する考え方に過ぎない。政治を考えることで社会の何が切り取れるのか、社会のどのようなことがわかるのかについては、ぜひ政治系の講義などを通じて学びを深めていってもらいたい。

【考えてみよう】

- 世界で移民の受け入れが多い国はどこか調べてみよう。
- 世界で移民の送り出しが多い国はどこか調べてみよう。
- 同様に移民国家とされるアメリカの移民受け入れの状況とカナダの状況を比較してみよう。
- 日本が移民を受け入れるのにはどのような困難があるのか考えよう。

[*22] このようなカナダの移民受け入れが、少子高齢化対策としてどれほど有効なのかは、また別の議論である。若年層を移民として受け入れていたとしても、移民もまた高齢化していく。また、長期的には移民の受け入れは必ずしも経済的にプラスに働くとは限らない。

〈参考文献〉

綾部恒雄・飯野正子、2010 年、「多民族国家カナダ―カナダの移民小史」、飯野・竹中（編著）『現代カナダを知るための 57 章』、明石書店。

飯野正子・竹中豊（編著）、2010 年、『現代カナダを知るための 57 章』、明石書店。

――、2012 年、『カナダを旅する 37 章』、明石書店。

木村和男（編）、1999 年、『カナダ史』、山川出版社。

古地純一郎、2017 年、「『ポイント制』の導入と難民受け入れ策」、細川（編著）『カナダの歴史を知るための 50 章』、明石書店

友原章典、2020 年、『移民の経済学―雇用、経済成長から治安まで、日本は変わるか』、中公新書

日本カナダ学会（編）、2009 年、『はじめて出会うカナダ』、有斐閣。

細川道久、2007 年、『カナダの歴史がわかる 25 話』、明石書店。

細川道久（編著）、2017 年、『カナダの歴史を知るための 50 章』、明石書店。